

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00699

研究課題名(和文) 16～17世紀における銀の移動と情報伝達：グローバル・ヒストリーの視点から

研究課題名(英文) Global Migration of Silver and Information Transmission in the 16th and 17th Centuries

研究代表者

森脇 優紀 (Moriwaki, Yuki)

東京大学・大学院経済学研究科(経済学部)・特任助教

研究者番号：90733460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：16・17世紀の銀と情報の世界的移動について、モノとしての銀と情報伝達媒体としての紙に着目し、分析化学の手法による銀の分析や古文書学の手法による文書料紙分析という文理融合の研究に取り組んだ。

銀の分析では、XRFによって伝世する日本銀と南米銀の主要元素を明らかにした上で、より高感度のPIXE法によって両者の微量元素比較を試みた。課題は残ったものの、今後の銀研究におけるPIXE法の有用性を確認できた。紙の分析では、宣教師らが書簡等に用いた紙の種類、用途による紙の使い分けの一端を把握することができ、16・17世紀のグローバル化世界における紙の流通を知る上で今後の研究基盤となる重要なデータが得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、16・17世紀の銀と紙の世界的移動の実態を把握するために、分析化学の手法による当時の銀の組成分析から、銀の世界的移動の根拠となる材料の産出地や鑄造地の特定につながる情報の取得を試み、情報媒体としての紙にも着目し、古文書学の手法を用いて文書の物質的・形態的側面からの調査によって、紙の種類や、時期・宛先・用途等による紙の使い分けを把握し、内容面のみでは分からない情報を蓄積した。このように、文献学的手法を基盤としつつも、銀そのものや情報媒体としての紙という物的側面から、実際のモノ資料を用いて自然科学的調査を取り入れた文理融合の研究を目指した点が、本研究の学術的意義であるといえる。

研究成果の概要(英文)：Concerning the global migration of silver and information in the 16th and 17th centuries, we focused on silver itself and paper as an information transmission medium. As an integration of arts and sciences research, we analyzed the composition of silver using the analytical chemistry method and the morphological characteristics of documents using the method of paleography or codicology.

In the analysis of silver, composition analysis by XRF revealed the main components of Japanese silver and Latin American silver at that time. In addition, we tried to compare the trace elements of both by PIXE method with higher sensitivity. Although some issues remained, we were able to confirm the usefulness of the PIXE method for future the silver research.

The research on paper has enabled us to figure out the types of paper used by the Missionaries for letters, and what kinds of paper were used according to purpose. We obtained important data that will serve as a foundation for the future research.

研究分野：キリシタン史

キーワード：世界システム論 グローバル・ヒストリー 大航海時代 比較・交流史 分析化学 料紙研究 古文書学 経済史

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

16・17世紀は、ラテンアメリカや日本などで産出された銀がスペインやポルトガルを介してマニラやマカオに集積され、そこから中国に流入する循環システムが存在したことで、グローバル化が始まった「銀の世紀」であったことは、アメリカの経済学者デニス・フリンらを中心に既に指摘されている。しかし、これまでの研究では銀の貨幣的側面に注意が注がれる傾向にあり、銀の物的側面からは検討されてこなかった。また、銀の流通を支えた陰には、紙による「情報の動き」があり、それに大きく寄与したのはイエズス会宣教師などによる現地報告文書であった。そして、こうした記録・情報伝達の媒体としての紙が世界を行き交うことで「グローバル・スタンダード」となったのは、まさに「銀の時代」の開始時と重なるのである。

2. 研究の目的

16・17世紀のマカオ・マニラ・日本をめぐる銀の流入と流出（世界的移動）を、近年蓄積されつつあるグローバル・ヒストリーの観点を踏まえつつも、分析化学の手法による銀の組成分析（非破壊調査）を通じて銀の世界的移動の実態把握につなげることで、モノとしての銀そのものの移動から再考察することを試みる。さらに、情報伝達の媒体として、銀と同様に世界を駆け巡った紙にも併せて着目し、原文書の内容読解だけでなく、紙種や筆致、装飾など文書の形態や物質的な調査を同時に行うことで、内容面からだけでは分からない情報を引き出す。銀や紙といった移動するモノと情報の側面から、16・17世紀の世界史を改めて見直すことで、この時代における世界の中の日本やアジアの意味を問い直すことにつなげていく。

3. 研究の方法

本研究は、16・17世紀における銀と情報の世界的移動について、歴史文書の分析による文献学的研究に加えて、モノとしての銀そのものや情報伝達媒体である紙そのものに着目して物的側面から分析するものであることから、下記3点の文理融合の研究手法により、学際的研究としての資料を多角的に解析した。

① 現地調査による関連資料の蒐集と分析

16・17世紀のイエズス会宣教師の現地報告書をはじめとする原文書を精査する文献学的手法により、②や③の研究手法に必要な情報やデータを蒐集・分析した。

② 分析化学の手法による銀の分析

伝世する当時の日本銀やラテンアメリカ銀の組成について可搬型蛍光 X 線分析装置などを用いて非破壊で分析し、そこに含まれる微量元素を比較することで、ボリビアやメキシコなどのラテンアメリカ銀や日本銀の世界的移動を、物的な側面から裏付けることを試みた。

③ 古文書学の手法による文書料紙分析

16・17世紀世界を行き交ったイエズス会宣教師の日本関係現地報告書をはじめとするキリシタン関係文書について、文書の内容分析と並行して、現文書の紙質調査（原料繊維の観察と紙種の判定）をすることにより、文書の様式・機能・内容等と紙種の相関関係を洗い出し、当時の情報の動きや紙の世界的流通について古文書学的観点から分析を加えた。

4. 研究成果

(1) 日本銀・ラテンアメリカ銀の組成分析による、銀の世界的移動の実態把握の試み

まず、東京大学大学院経済学研究科が所蔵する日本銀（49点）およびメキシコ銀（2点）について、東京藝術大学にて可搬型蛍光 X 線分析装置（XRF）を用いて組成分析し、両者に含まれる微量元素の比較分析をした。結果、日本銀については、主に Ag（銀）・Cu（銅）・Pb（鉛）・Bi（ビスマス）の元素を、メキシコ銀については、主に Ag・Cu を確認した。しかし、対象資料には、経年劣化による腐食や、特に日本の貨幣では「色揚げ」と呼ばれる伝統的な表面処理の影響を受けているものが含まれており、微量成分の情報が明確に得られず、XRF 分析では、日本銀とメキシコ銀の区別は困難であった。

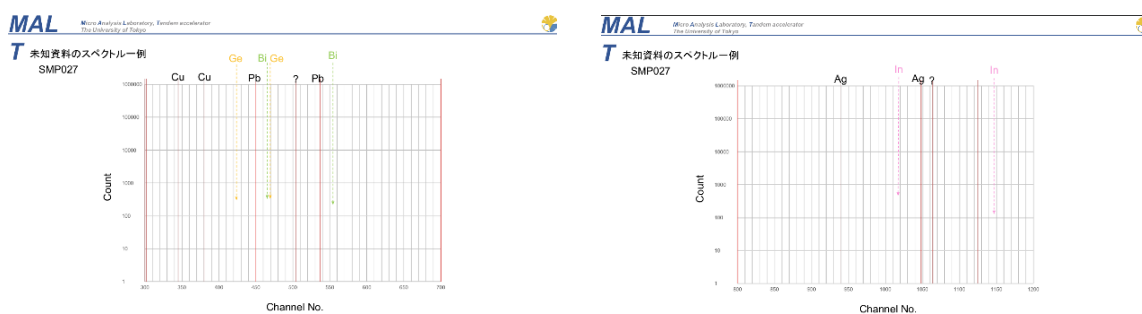
そこで、東京大学総合研究博物館タンデム加速器研究施設（MALT）にて、より銀内部の地金の微量元素の情報を非破壊で取得でき、かつ感度の高いタンデム加速器を用いた粒子線励起 X 線分析（PIXE）を試みることにした。文化財、特に貨幣を対象とした PIXE 分析に関しては、文化財を資料とした PIXE 分析の先行研究はあるが、高エネルギーのビーム照射による資料への損傷の程度に関する情報は、先行研究からは十分に得られなかった。そのため、まずは、今後の分析用に新規購入した 17 世紀頃のラテンアメリカ製の銀貨（ポトシ製・メキシコ製の計 43 点）を事前に XRF で測定した上で、そこから小型・軽量で凹凸が比較的少ない 1 点を選んで試験的に分析を実施し、PIXE 利用における資料へのダメージの程度を確認し、日本銀とラテンアメリカ銀の区別するための分析条件などを検証することとした。しかし、2020 年の COVID-19 の世界的拡大により、分析のための施設利用が制限され、分析の一時中断を余儀なくされた。

2021 年、分析のための施設が利用可能となった段階で、XRF による分析を再開し、その後 PIXE による試験的分析を実施した。PIXE 分析の結果、ダメージの程度については、目視およびデジタルマイクロスコープで観察した限りでは、ビーム照射による顕著な損傷は確認されなかった。

また、事前に実施した XRF 分析では取得できなかった複数の元素が検出され、また測定時間が長いほど明瞭なピークが得られることが確認できた。そのため、PIXE 分析が、銀の世界的移動の根拠となる材料の産出地や鑄造地を明らかにするための有用な手法となりうると考えられた。

なお、上記分析に先だって、当時のポトシとメキシコの貨幣鑄造の歴史的背景を踏まえつつ、当該資料の刻印面などを観察・分類したところ、ポトシ銀貨には、偽造が問題となった貨幣、偽造問題の後に新たなデザインで鑄造された貨幣、異なるエンサヤドール（試金を司る検査官）による貨幣が含まれていることが分かった。それにより、ポトシとメキシコ銀の含有元素の比較のみならず、ポトシ銀貨については、偽造貨幣と偽造問題対処後の貨幣との比較や、各エンサヤドールの貨幣から検出される微量元素の比較が可能となり、今後、当該資料の科学調査によって、ラテンアメリカ銀の世界的移動の実態解明の手がかりを得られることが期待できる。

2022 年からは「東京大学総合研究博物館タンデム加速器研究施設の共同利用」に参画した（課題名：「日本銀とラテンアメリカ銀に含まれる微量元素比較」）。前年の試験分析をふまえて、当該ラテンアメリカ銀の本格的な組成分析を実施したが、以下の図が示す通り、日本銀やラテンアメリカ銀を区別する指標となる微量元素 Ge（ゲルマニウム）・In（インジウム）・Bi のピークは確認できず、また「？」で示したピークは、資料に含まれると想定された元素のピークとずれが生じており元素同定に至らず、本研究課題の遂行に不可欠な結果を得ることができなかった。



対象資料の一例（資料 No. 027）の測定結果（スペクトル）（MALT 提供）

こうした当初予想とは異なる結果が出た要因の一つとして、対象資料の厚みが不均一であることから、対象資料におけるビーム照射面の高さが変化してしまったことが考えられた。その対応策として、厚みが不均一な資料を固定するための資料ホルダーを新たに設計する必要性が考えられた。しかし、ホルダーを対象資料に適した安全性が担保できるものにし、課題遂行に不可欠な測定結果を得るためには、測定を複数回繰り返して結果と照合しながら改良・調整を繰り返す必要があるため、本研究期間内で問題点を解決して再測定するまでに至らなかった。

このように課題は残ったものの、今後の銀の世界的移動に関する物的側面からの研究において、PIXE 法が有用であることを確認できたことは、意義のあるものとなったと考えている。

(2) 16・17 世紀キリシタン関連原文書の料紙分析による、紙の世界的移動の実態把握の試み

16・17 世紀に世界を行き交った情報（文書）は、どのような紙に記されて移動したのか、文書の時期や宛先・差出や用途によって紙種に違いがあったのか、特にイエズス会の日本関係の現地報告書などキリシタン関係文書について、内容確認および料紙分析によってデータを蓄積していくことで、当時の紙の世界的移動の実態把握を試みた。調査は、現文書を所蔵する国内外の諸機関（京都外国語大学附属図書館、日本二十六聖人記念館、ローマ・イエズス会文書館 [ARSI]、バチカン教皇庁図書館、カサナテンセ図書館、アンジェリカ図書館、ドミニコ会サンタ・マリア・ノヴェッラ図書館 [SMN]）にて実施した。

京都外国語大学附属図書館では、「日本関係イエズス会原文書」4 点すべてが雁皮紙であると判断された。日本二十六聖人記念館では、イエズス会関係の文書のうち、日本発信の文書 1 点は雁皮紙であることを確認した。また、ヨーロッパや日本以外の宣教地から発信された書簡（洋紙 3 点）については、ウォーターマーク（透かし模様）の図柄を調査した。ウォーターマークは、紙の生産地や生産者、生産時期の特定につながる重要な痕跡であるため、ウォーターマークのデータ蓄積は、当時のイエズス会の紙の入手ルートの解明に今後つなげていくことが可能である。

ローマ・イエズス会文書館所蔵の日本関係文書は、約 18,000 葉と膨大な量であることから、下記のように、作成時期や文書の種類・機能（個人書簡、年報や訓令などの公式文書）が異なる資料を厳選して紙質調査を実施し（全 68 点）、時期的な違い、宛先・差出の違い、文書の用途・機能の違いで用いられる紙種の違いを検討した。

① 宣教初期の書簡（1549-62 年、1563-65 年）

（和紙が使用された最初期の事例を確認し、洋紙から和紙への使用の推移を検証する）

② 織田信長から贈られた紙を使用した可能性のある文書群（1571-78 年）

（1571 年末に信長がイエズス会に紙を 80 連与えたとの記録があることから、これ以降の 1570 年代の書簡には、信長から贈呈された紙が実際に用いられた可能性が高いため）

③1612年の禁教令以降キリシタン弾圧下での日本国内発信の書簡および年報（1630-32年）

（宣教活動や物資調達が自由に行なえた時期の文書とは紙種や品質が異なるかを把握する）

④議事録・諸規則・訓令・年報などイエズス会の公的文書

⑤京都外国語大学付属図書館所蔵の第二文書の関連文書（1587年）

全68点のうち、和紙は32点、洋紙は36点であった。洋紙は、1点を除き1549年から1565年までの文書であることから、宣教初期は文書には主として洋紙を用いていたことが分かる。なお洋紙については、二十六聖人記念館の文書と同様に、ウォーターマークの調査をした。

和紙の紙種の内訳は、雁皮紙が28点、楮紙が1点、三椏紙が2点で、残り1点は漉返紙であった。時期的な観点から述べると、宣教初期には主として洋紙が用いられている一方で、和紙を用いているものは5点あり、そのうち最初期のものは1561年の2点であった。信長から贈られた紙を使用した可能性のある1570年代の文書については、今回の調査では6点にとどまったが、1点を除いて雁皮紙であった。禁教令以降の文書3点は、2点が雁皮紙、1点は三椏紙であった。

紙種ごとに各文書の宛先・差出、用途や機能を見てみると、楮紙は、日本人がローマの修道士に宛てて日本語で書いた書簡であり、宛先・差出ともに司祭ではない人物であることは、今後、楮紙が使われている文書の機能や用途を考える上で、重要な意味をもつ可能性がある。三椏紙は2点とも、イエズス会総長宛の書簡である。三椏紙については、宣教師の文書には記録が確認されず、『日葡辞書』にも確認できない。そのことから、宣教師が三椏紙を把握していなかった可能性が考えられ、当該2文書も三椏紙として理解して使用していたかは疑問が残る。雁皮紙は、8点が総長宛の書簡で、4点が総長以外を宛先とする書簡、残り16点は、会議議事録・規則・総長からの訓令・年報という公的文書であった。さらにこの中の4点には、内雲（雁皮紙の一種で、色紙や懐紙、表紙などに使われる）が用いられていることが確認された。なお、『日葡辞書』にもその名称が確認でき、宣教師が認識していたことが分かる。内雲を用いた文書は、2点が公的文書の表紙に用いられ、残り2点は総長宛の書簡の本紙に使われていた。総長宛の書簡は、いずれも1561年のもので、和紙よりも洋紙の使用が多かった時期における最初期のものである。また、内雲の本来の用途とは異なる書簡の本紙に用いていることも併せて考えると、内雲の見た目の美しさから、上位の人物である総長宛の書簡に用いられた可能性も考えられる。

バチカン図書館では、教皇パウロ5世宛の日本人信徒による奉答書（5点）や教皇パウロ5世宛の伊達政宗文書（1点）を調査し、差出人が武士身分であれ、一般信徒であれ、雁皮系の紙を用いていることが分かった。なおSMNでは、バチカン図書館所蔵の奉答書と関連が指摘される文書1点について、内容確認および料紙調査を実施した。結果、当該文書がバチカン図書館所蔵文書と同様の雁皮紙であり、バチカンの文書の別便（第1便）の原本であることが確認できた。

カサナテンセ図書館では、禁教令以降のキリシタンの信徒組織関連の文書類7点を調査した。これらの文書の紙種は、楮紙、三椏紙、雁皮紙（各1点）のほか、原料繊維を混合した紙と思われるもの（三椏と楮、三椏と雁皮）、同じ文書内で2種類の紙種（楮紙と雁皮紙）を用いたものと多様であった。特に、同一文書内で楮紙と雁皮紙を用いたものは、雁皮紙には欧文が記されており、ペン書きの欧文との相性から雁皮紙を選んでいた可能性を示す根拠となりうる。ARSIでの調査で雁皮紙の割合が多かった点も併せて、今後さらに検討する必要がある。

アンジェリカ図書館では、慶長遣欧使節に関する刊本等が合冊された書籍の末尾に綴じこまれた紙を調査した。これは文書ではなく、楮の雑紙で決して上質とは言えないものであったが、文書以外の紙そのものとしての和紙がヨーロッパに渡った物的証拠であるとともに、和紙に対するヨーロッパ人の関心を示す資料として重要なものであるといえよう。

以上の調査結果はごく一部の結果に過ぎず、さらにCOVID-19の世界的拡大の影響で調査を中断されたため、十分なデータを得られてはいないが、作成時期や、文書の差出・宛先、文書の種類・機能（個人書簡、年報や訓令などの公式文書）の異なる資料を厳選して料紙調査を行うことで、16・17世紀当時、記録媒体として日本から世界中に渡った紙の種類や、時期や宛先・差出、用途による紙種の違いの一端を把握することができ、16・17世紀のグローバル化世界における紙の世界的移動を知る上で今後の研究の基盤とすべき重要なデータを得ることができた。

なお、研究期間中には、オンライン講座「歴史史料をモノから読み解く：何に情報を記すのか」（東京大学経済学図書館・経済学部資料室・東アジア藝文書院・読売調査機構「オンライン連続講座「知の継承（バトン）」2021年度第1回講座「紙の誕生と伝播から見る『記録媒体の世界史』：東洋から西洋へ」）を開催し、研究成果の社会還元にも努めた。

<引用文献>

- ①森脇優紀「イエズス会宣教師と紙—キリシタン関係諸史料への古文書料紙研究の応用」川村信三編、キリスト教史学会監修『キリシタン歴史探求の現在と未来』教文館、2021年、217-258頁
- ②田口智子・森脇優紀・松崎浩之「日本銀とラテンアメリカ銀の世界的移動の痕跡をたどる文理融合的研究（1）：XRFとタンデム加速器（PIXE法）による微量元素比較の試み」『東京大学経済学部資料室年報』12号、2022年、30-50頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 小島浩之・矢野正隆	4. 巻 60-1
2. 論文標題 漢字・字喃經典への料紙調査の応用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20495/tak.60.1_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 丸橋充拓	4. 巻 48-3
2. 論文標題 歴史に見る「海の中国」：中国の将来像を見据えて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界平和研究	6. 最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/12118801	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤幸司	4. 巻 500
2. 論文標題 中世日本最大の国際貿易港 室町・戦国時代の博多とアジア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西日本文化	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田口智子・森脇優紀・松崎浩之	4. 巻 12
2. 論文標題 日本銀とラテンアメリカ銀の世界的移動の痕跡をたどる文理融合的研究(1)：XRFとタンデム加速器(PIXE法)による微量元素比較の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 30-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤幸司	4. 巻 217
2. 論文標題 アジアに雄飛する大内氏	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴博	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuki Moriwaki	4. 巻 77
2. 論文標題 Materials on Christianity and Spanish Documents in the Foronda Collection	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CSEAS NEWSLETTER	6. 最初と最後の頁 47-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小島浩之	4. 巻 843号
2. 論文標題 竹紙小考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 30-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島浩之	4. 巻 719号
2. 論文標題 中国の文書とその料紙	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 28-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件（うち招待講演 17件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Masataka Yano, Hiroyuki Kojima
2. 発表標題 Types of Paper Used for Religious Documents in Southeast Asia: A Survey of Writing Papers in Chinese Characters and ChuNom"
3. 学会等名 The 12th International convention of Asia schol-ars Kyoto, Japan (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川村信三
2. 発表標題 基調講演：日本信徒の教皇パウロ5世宛て「奉答書」新発見史料を読み解くー新出史料「フィレンツェ発見文書」と既知のバチカン文書群の関連性の考察
3. 学会等名 角川文化振興財団・朝日新聞社共催 日本・バチカンプロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川村信三
2. 発表標題 フィレンツェ新出史料について
3. 学会等名 キリシタン文化研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小島浩之
2. 発表標題 東アジア古文書学の構築にむけて：国内所蔵中国古文書調査から
3. 学会等名 明清史夏合宿（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川村信三
2. 発表標題 ローマ教皇と日本人信徒の往還－奉答書をめぐる日本・パチカン交流の記憶（長崎奉答書のケース）
3. 学会等名 角川文化振興財団・朝日新聞社共催 日本・パチカンプロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島浩之・森脇優紀
2. 発表標題 歴史史料をモノから読み解く：何に情報を記すのか
3. 学会等名 東京大学経済学図書館・経済学部資料室・東アジア藝文書院・読売調査機構「オンライン連続講座「知の継承(パトン)」2021年度第1回講座「紙の誕生と伝播から見る『記録媒体の世界史』：東洋から西洋へ」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島浩之・矢野正隆
2. 発表標題 料紙調査からみた「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」の基礎的考察
3. 学会等名 東南アジア学会第103回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川村信三
2. 発表標題 イエズス会古文書紙質調査をうけて、その書簡内容の吟味
3. 学会等名 キリスト教史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森脇優紀
2. 発表標題 16世紀イエズス会宣教師書簡に用いられた紙質調査報告
3. 学会等名 上智大学史学会・院生会 合同月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIZUME Masato
2. 発表標題 Commodity Flows and the Payment System during the Edo Era
3. 学会等名 World Economic History Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ONOZUKA Tomoji
2. 発表標題 The First and the Second Global Economy: A comparison of the international labor movements in the two periods of globalisation
3. 学会等名 Annual Conference 2018, The Korean Economic History Society (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小島浩之
2. 発表標題 アジアの紙を俯瞰する：情報伝達基盤のグローバリゼーション
3. 学会等名 アジアライブラリーカフェno.004 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計21件

1. 著者名 中島隆博編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 368
3. 書名 人の資本主義	

1. 著者名 鹿毛敏夫・伊藤幸司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 400
3. 書名 硫黄と銀の室町・戦国	

1. 著者名 木畑洋一・安村直巳編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 386
3. 書名 主権国家と革命：15～18世紀	

1. 著者名 伊藤幸司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 563
3. 書名 中世の博多とアジア	

1. 著者名 川村信三編・キリスト教史学会監修	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 262
3. 書名 キリシタン歴史探究の現在と未来	

1. 著者名 社会経済史学会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 746
3. 書名 社会経済史学事典	

1. 著者名 大庭康時・佐伯弘次・坪根伸也編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 180
3. 書名 島嶼と海の世界	

1. 著者名 丸橋充拓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 210
3. 書名 江南の発展 南宋まで	

1. 著者名 Carmen Yuste Lopez	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Universidad Nacional Autonoma de Mexico, Instituto de Investigaciones Historicas	5. 総ページ数 374
3. 書名 Nueva Espana, puertaamericana al Pacifico asatico	

1. 著者名 岸本美緒編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 296
3. 書名 1571年 銀の大流通と国家統合	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川村 信三 (Kawamura Shinzo) (00317497)	上智大学・文学部・教授 (32621)	
研究分担者	田口 智子 (Taguchi Satoko) (90755472)	東京藝術大学・未来創造継承センター・特任准教授 (12606)	
研究分担者	丸橋 充拓 (Maruhashi Mitsuhiro) (10325029)	島根大学・法文学部社会文化学科・教授 (15201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 幸司 (Ito Koji) (30364128)	九州大学・比較社会文化研究院・教授 (17102)	
研究分担者	小島 浩之 (Kojima Hiroyuki) (70334224)	東京大学・大学院経済学研究科(経済学部)・講師 (12601)	
研究分担者	平山 篤子 (Hirayama Atsuko) (20199102)	帝塚山大学・経済経営学部・非常勤講師 (34601)	削除：2020年2月10日
研究分担者	稲葉 政満 (Inaba Masamitsu) (50135183)	国立文化財機構東京文化財研究所・保存科学研究センター・客員研究員 (82620)	削除：2020年5月22日

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鎮目 雅人 (Shizume Masato)		
研究協力者	小野塚 知二 (Onozuka Tomoji)		
研究協力者	矢野 正隆 (Yano Masataka)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	橋本 雄 (Hashimoto Yu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関